

18 【じめえ】

「せつないのう」

ぼくはいいました。

この言葉はたぶん、ぼくの口癖になっていたのです。

「今度はなんですか」

懐爺はききました。

ぼくは説明しました。

一週間前に、転校生がやってきました。

先生がめずらしく畏（かしこ）まって、

「町の学校からきた、優等生です」

といいました。

おそらく町長のこどもか、教育委員長の孫（まご）だろう、とぼくはおもっていました。

先生が畏まるのは、町長と教育委員長の前だけだからです。

「その優等生は、いじめっ子なんですね」

「どうして、しっとるんじゃ」

ぼくはいじめられたら、十倍にして返す性格だからいいけれども、ともだちの完ちゃんが、やられる。

ぼくのみていないところで、やられる。

「かいじい、どうするかのう」

「相手はおばけですから、普通のやりかたでは無駄（むだ）です」

「なんじゃ、あいつもおばけか」

ぼくはあきれました。

あきれたというより、飽（あ）きていました。

この村は、おばけ村なのか。

それともぼくが、おばけをよぶ巫女（みこ）なのか。

「このおばけは、【じめえ】といいます。もともとは〈いじめえ〉でした。

この〈いじめえ〉の兄が〈まじめえ〉で、弟が〈けじめえ〉。兄も弟も良い子だったんですが、〈いじめえ〉に影響されて悪い子になってしまった。ですから【じめえ】は、三兄弟のことをいいます。金ちゃんの学校にやってきたのが、何番目かはわかりませんが」

懐爺は、真面目な顔をしていました。

「めんどうじゃのう」

ぼくは正直にいました。

あんな気味悪い顔をした、転校生の兄弟なんかに会いたくもない。

鯰（なまず）の形をした目と目が、ひつついている。

蟹そっくりの口元に、いつも泡（あぶく）が音をたてている。

おもわず、【かにくいおんな】をおもいだしました。

「そう面倒でもありませんよ。いいですか、【じめえ】が近寄ってきたら、金ちゃんも完ちゃんも、こういうんです。きみはいいこ、きみはいいこ」

「きみわるい、おまじないじゃな」

「さあ、わたしに声を合わせて、金ちゃんも。きみはいいこ、きみはいいこ」

「きみはいいこ、きみはいいこ」

ぼくは、しぶしぶ合わせました。

「金ちゃん、心がこもっていませんね。おばけは、相手の心を見ぬくのが上手ですからね」

「きみはいいこ、きみはいいこ」

「そうそう、それでけっこう。完ちゃんに教えてあげてください。それと、【じめえ】のほかの二人の兄弟は、前からいる生徒に化けていますから、ご注意を。でも、転校生一人を退治すれば、のこりは消えるはずで」

「きょうだいは、どこじゃ」

「兄弟は、転校生の【じめえ】のうしろにいて、けしかけたりはやしたりしていますから、すぐにわかりますよ」

「おった、おった」

しかしあの、餓鬼どもにも心をこめて、

「きみはいいこ、きみはいいこ」

なんていいたくはない。

しかし懐爺の指示は絶対。

指示にそむいたら、おばけは図に乗る。

その夜にぼくが完ちゃんによく教えこんで、翌朝から完ちゃんが見事に実行したのは、いうまでもありません。

その翌日、転校生はまたどこかへ、転校していきました。

転校生がいなくなると、その兄弟もすっかり、元の優しい生徒にもどりました。